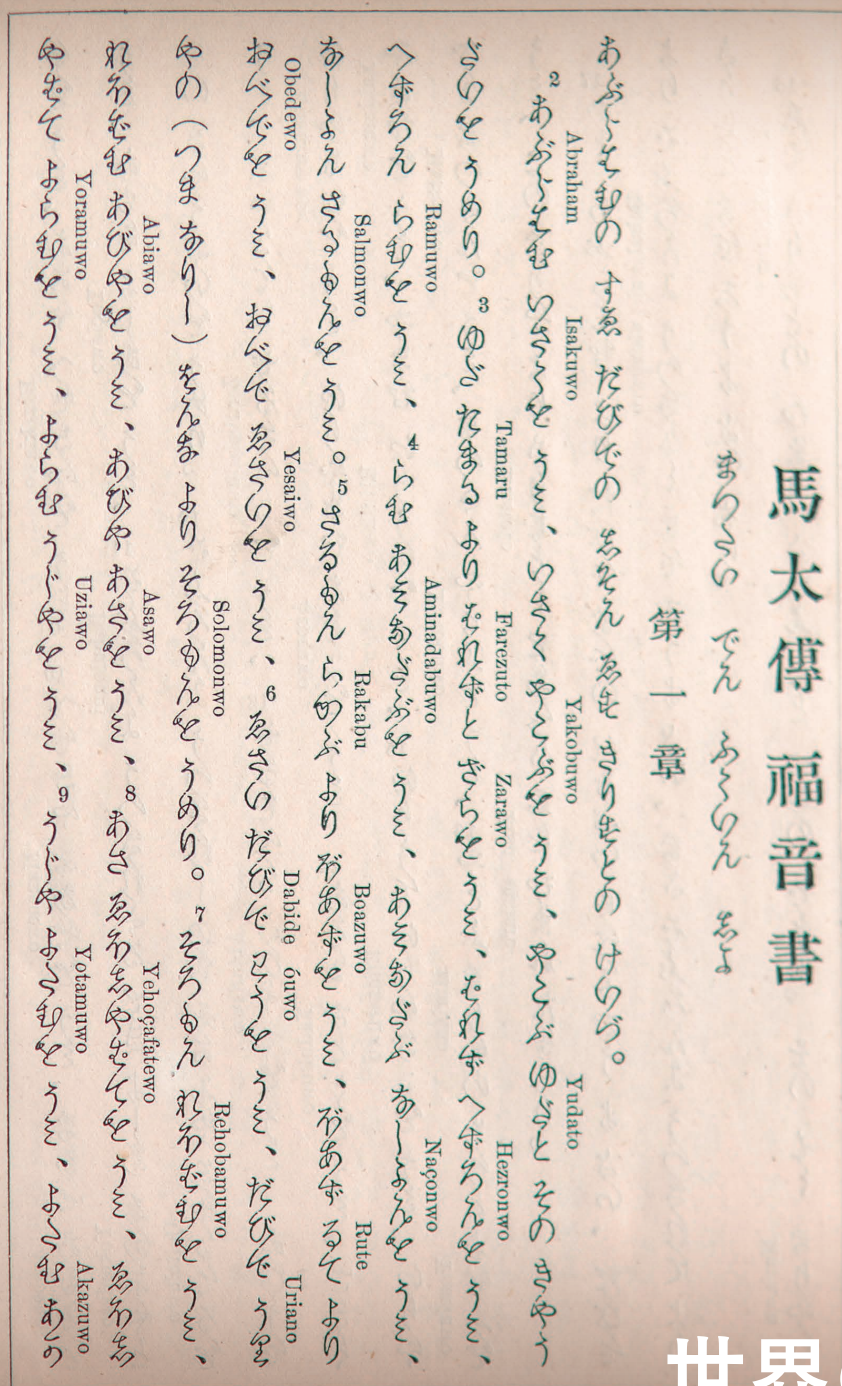


図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2019.
November
No.187



世界の図書館

1 大絶滅と人新世

図書館長 北垣 徹

2 研究ノートから

「信仰という名による虐待を防ぐ」

神学部 神学科 教授 才藤 千津子

ブラウジングルーム

「広大な経済学の世界を知ろう」

経済学部 経済学科 教授 相模 裕一

3-4 世界の図書館

中国雲南省の大学図書館と雲南省図書館

国際文化学部 国際文化学科 教授 金縄 初美

オーストラリア・ノーザンテリトリー州立図書館

文学部 英文学科 教授 一谷 智子

5-6 図書館から研究支援を考える

雑誌費の高騰とオープンアクセスの流れ

図書情報課 副課長 山下 大輔

7 蔵書ギャラリー no.27

『馬太傳福音書』

神学部 神学科

教授 金丸 英子

人類の活動によって現在、地球上にいる約800万種のうち、およそ100万種の動植物が絶滅の危機にさらされている——この警告する衝撃的な報告書を、今年の5月にIPBESが公表しました。IPBESとは、生物多様性^{イブス}や生態系について現状や変化を科学的に評価し、政策提言を行う政府間組織で、国連環境計画の主導で2012年に設立された組織です。地球温暖化問題について同様の役割を担っているのが、1988年設立のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）で、これらの機関には、世界の多くの国の科学者たちが集結し、共同で研究を行いつつ、地球や生物をめぐる危機を見据えています。

100万種の動植物が失われつつある現在の状況は、「6度目の大絶滅 the Sixth Extinction」と呼ばれることになるのかもしれませんが。アメリカの科学ジャーナリスト、エリザベス・コルバートは、ピューリッツァー賞を受賞した著書のなかで、過去の大絶滅を振り返りつつ、現在の危機的状況を興味深いエピソードとともに描き出しています*1。過去5億年に、短期間で生物の多様性が失われる大絶滅は計5回起こっており、それらは「ビッグファイブ」と呼ばれています。最初の大絶滅は、大半の生物がまだ水中で暮らしていた約4億5千万年前、オルドビス紀に起こりました。原因は、それ以前には温室効果をもたらしていた二酸化炭素の濃度が下がり、地球が寒冷化したことだと推測されています。2度目のデボン紀の大絶滅の後、3度目は2億5千万年前のペルム紀に起こりますが、これは史上最大の大絶滅で、このとき地球上の生物種の約90%が姿を消したと言われます。その原因は、オルドビス紀とは逆方向の気候変動で、気温が急上昇し、海水温が10度上がったせいだと考えられています。さらに2億年前の三畳紀に、4度目の大絶滅が続きます。

もっとも最近に起こったのは、6500万年前の白亜紀末の大絶滅ですが、おそらくこれが「ビッグファイブ」のなかで、もっとも有名なものでしょう。このとき、大型の恐竜や首長竜、翼竜らがすべて絶滅しますが、その原因はなんと、巨大隕石が落ちてきてユカタン半島付近に激突したことだと推測されています。この大絶滅後に地上に拡がるのが、われわれヒトを含めた哺乳類ですが、隕石の衝突がなければ、進化の道筋も異なり、われわれも存在しなかったかもしれません。

恐竜のおもちゃで遊んでいる子どもたちは、それが巨大な動物であつたが、すでにこの世には存在しないことを知っています。大絶滅とは、現代の子どもたちが最初に出くわす科学概念かもしれないと、コルバートは述べています。現在では常識のように思われますが、科学史を振り返るなら、絶滅とは何ら自明の概念ではないことが分かります。聖書にもとづくキリスト教の世界観においては、生物種とは神の創造

以来、あるいはノアの箱舟以来、今日まで変わらずに連続しているものでした。絶滅の概念は、18世紀末、ジョルジュ・キュヴィエによってもたらされます。彼はパリの自然史博物館に送られて来た化石標本を、原生生物のものではなく、以前は存在したが今はもういない「失われし種」のものであると結論づけます。種は絶滅する——これはフランス革命直後の時代において、それまでにはない画期的なアイデアでした（しかしキュヴィエは、種が変化するとは考えず、進化論には至りませ

んでした）。

こうした過去の「ビッグファイブ」に匹敵する6度目の大絶滅が、現在進行中である——このことが次第に明らかになりつつあります。その原因は、過去のいずれのものとも異なり、地球の40億年に及ぶ生命史のなかで、ほんの新参者に過ぎない種によってもたらされました。つまり、われわれヒトの活動が種の大絶滅をもたらしているのです。それはコルバートが示すように、さまざまなかたちで起こっています。例えば「最初にペンギンと呼ばれた鳥」オオウミガラスのように、北大西洋の島に多く生息しながら、大型で飛べない鳥だったため、航海者たちに簡単に捕まえられて食べられてしまい、19世紀半ばに絶滅に至った種もいます。

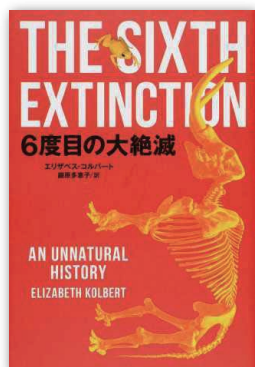
また、「パナマの黄金のカエル」ゼテクヤセヒギガエルなど、中南米のいくつかの種のカエルは、つい最近まであちこちで見かけられていたのに、さっぱり鳴き声が聞かれなくなりました。こうしたカエルが短期間で絶滅に至った原因は、ツボカビ菌に感染したせいだと判明します。この菌が広まったのは、感染しても発症しない別種のカエルが別の地から持ち込まれたからのようです。つまりヒトが、食用あるいは薬製造のために、アフリカから中南米まで、ある種のカエルを持ち込んだことが、ツボカビ菌の拡散に至った——ヒトやモノの地球規模での移動が頻繁になるグローバル化が、種の絶滅をもたらしたのです。

そして人類の活動は、特定の種のみならず、地球全体を地質学的な規模で変えつつあります。人類はすでに、地表の三分の一から半分に手を加え、世界中の主要な河川の大半にはダムが建設されています。より重大なのは、化石燃料の燃焼と森林破壊により、人類が大気の組成を変えてしまったことです。大気中の二酸化炭素は、産業革命以降の2世紀で40%上昇し、より強力な温室効果ガスであるメタンガスの濃度は、二倍以上になったと言われています。このような状況を踏まえ、オゾン層破壊物質の発見でノーベル賞を受賞したオランダの化学者パウ・クルツツェンは、地質学的な年代として、われわれはすでに新たな時代に入っていると主張しています。つまり、最終氷期が終わった1万1700年前に始まり、現在まで続いている完新世は終わり、すでに新たな時代である人新世が始まっている（地質学的には、世は紀の下位区分。完新世は第四紀の一区分）というわけです。

折しもこの夏、南米アマゾンの熱帯雨林の火災が、かつてない規模で拡がり、生態系を大きく破壊しているというニュースが、人々に衝撃を与えています。フランスのビアリッツで開かれた七カ国首脳会議（G7）でも、この問題が取り上げられ、消火のための緊急の援助が決定されました。森林の保護よりも開発を優先させたとして、また火災の原因は環境保護のNGOによるものだというフェイクニュースを流したとして、ブラジルのボルソナロ大統領に非難の声が向けられています。他方でG7では、アメリカのトランプ大統領が環境問題に興味を示さず、会議後に出される通常の詳細な首脳宣言は見送られ、フランスのマクロン大統領が土壇場でまとめた1ページの成果報告を出すに止まりました。1975年に、時のフランスの大統領ジスカールデスタンの提唱により、ランブイエで始まった首脳会議も、半世紀を経ずして、その役割は失われつつあります。他方でわれわれはどうやら、数十年といった通常の人生に収まる範囲の変化だけでなく、完新世から人新世という万年単位の途方もない時間のなかで、激変を眼前にしているようです。

参考資料

1) エリザベス・コルバート著、鍛原多恵子訳「6度目の大絶滅」NHK出版、2015年[5階 B: 通常書架 467/5/110]

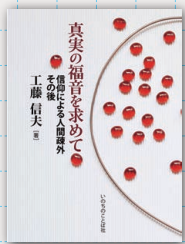


THE SIXTH EXTINCTION
6度目の大絶滅

信仰という名による虐待を防ぐ

神学部 神学科 教授 才藤 千津子

聖書には、イエスが進んで社会から疎外され小さくされている人々の中に入ってゆき、彼らが人間らしく生きられるように奮闘される様子が生き生きと描かれています。しかし一方では、イエスが批判されたように、信仰が人を虐待し、人間疎外をもたらすこともあります。例えば、信仰者の「道徳生活」「こうあらねばならぬ」が強調される場合には、結果として理想を実行できない人が責められることもあります。また、宗教者が「神の名のもとに」信徒に対して誤った「パワー(力)」を行使し、信徒を傷つけるということも起こります。私は現在、神学部で将来牧師になる人たちの教育に携わっていますが、教会で「信仰」という名のもとに傷つけられ、ハラスメントを受ける人がないようにどうすべきかを考える必要性を痛感しています。



真実の福音を求めて

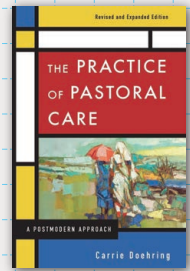
これらの問題を考えるにあたっては、ハラスメントについての一般の書籍の他に、キリスト教の分野でも役に立つテキストが出版されています。例えば、パスカル・ズィヴィー、福沢満雄、志村真『「信仰」という名の虐待』(いのちのことば社、2002年)は、「信仰」という名のもとに起こる虐待、スピリチュアル・アブユーズ (Spiritual Abuse) とそのメカニ

ズムを説明しています。また、近年のものでは、工藤信夫『真実の福音を求めて—信仰による人間疎外、その後』(いのちのことば社、2015年)で、長年この問題に取り組んできた精神科医が、教会の中での宗教者の精神的・霊的な暴力を防ぎ、喜びと励ましに満ちた共同体を形成してゆくにはどうしたら良いかを提言しています。

宗教者と信徒の関係におけるハラスメントを考える際の重要な要素は、パワー(力)の誤った行使、他者への支配の問題です。友人、職場の同僚など、同じ地位にある人たちの関係は基本的に平等ですが、片方が牧師、先生など権力や社会的特権を持っている場合には、彼らの言葉や行動によって弱い立場にある人々が傷つけられるということが起こります。米国の神学者 Carrie Doehring は、『The Practice of Pastoral Care: A Post Modern Approach, Revised and Expanded Edition』(Westminster John Knox Press, 2015)の中で、牧師は、ハラスメントが起こる土壌の権威主義的な構造を読み解くことの他に、信徒との関係においてパワー力学がどのように働いているかを認識し、それを常に自ら「観察」することを学ばなければならないと言っています(pp.43-46)。人々との健全な関係を深めるために、宗教者は、自らの弱さと限界性を認め常に自省しなければならないのです。

工藤信夫著『真実の福音を求めて』いのちのことば社、2015年[2階 G33~39: 電動集密 198/34/261]

Carrie Doehring, *The practice of pastoral care: a postmodern approach*, Rev and expanded ed, Westminster John Knox Press, 2015[2階 G39~43: 電動集密 195/7/33]



THE PRACTICE OF PASTORAL CARE

ブラウジングルーム

広大な経済学の世界を知ろう

経済学部 経済学科 教授 相模 裕一

経済学部に入學した多くの学生が、数式の多い経済学のテキストに触れ溜息をする。「文系なのに、何故こんなに数学を・・・」。数学が不得手な学生は、数式をただで学習意欲を喪失してしまうだろう。確かに今の経済学部のカリキュラムでは系統的に理論体系をしっかりと学ぶことになっており、習得するには根気と努力が必要である。数学の問題を解くのと同様な学習を強いられ、数学が苦手な学生は教室から逃げ出したくなるだろう。

そんな時は図書館に逃げ込もう。実は経済学の世界は広大で奥深い。教室で学ぶのはその一部、一断面でしかない。経済学には地理、歴史、思想、哲学、医療、教育と実に幅広い世界に繋がっているのである。図書館の中には、必ず自分にフィットする経済学や経済学者と出会うことができると確信している。



聖トマス経済学

ここでは、自分の経験から、究極の1本の論文と書籍を紹介しよう。それは福田徳三の「トマス・ダキノの経済学説」と上田辰之助の『聖トマス経済学』である。福田徳三(1874年-1930年)は日本の経済学の源流、開拓者といわれる経済学者である。彼の論文「トマス・ダキノの経済

学説」(1905年)は、当時絶賛され彼の出世作となった論文である。トマス・ダキノとは、中世の神学者トマス・アクィナスのこと。150頁の論文には、アダム・スミス、マルクス、マーシャル等の経済学者から、アリストテレス、ヒエロニムス、アウグスティヌス、フランチェスコ等の哲学・神学者の所説がトマスの学説を軸に展開されている。驚くべきはトマスの『神学大全(Summa Theologica)』をはじめ多くの文献をラテン語の原典から引用している。当時にはまだ翻訳などなかったから当然かもしれない。

福田徳三は、経済学は単なる価格分析だけではだめで、倫理の問題に向わなければならないとし、市場による効率的な資源配分は、社会的な強者・弱者を生み出すが、すべての人に最低限の保障を与えなければならないと主張していた。

福田徳三は、日本の経済学の開拓者と言われるが、彼の経済倫理の源泉がキリスト教にあることを知る人は少ない。学生諸君にも彼の論文を読んで欲しいが、如何せん文体が硬くて古い。ここでは福田の孫弟子の上田辰之助の『聖トマスの経済学』を薦める。この本はみず書房から1991年に出版されている。また、福田徳三の本は通常書架にも何点か置いてある。是非OPACで検索してみたい。数式とは無縁の経済学の広大な世界があることを実感するだろう。

上田辰之助著『聖トマス経済学: 中世経済学史の一文献』みず書房、1991年[7階 自動書庫 330/8/1-1]

世界の図書館

[中国・オーストラリア編]



[写真1 雲南省図書館外観]



中国雲南省の大学図書館と雲南省図書館

雲南省昆明市月華街2929号
<http://www.ynni.edu.cn/>

雲南省昆明市五華区翠湖南路141号
<http://en.ynlib.cn/>

中国

国際文化学部 国際文化学科 教授 金縄 初美

今回は中国雲南省の大学図書館と雲南省図書館を紹介したいと思います。雲南省は中国の西南部に位置し、南はベトナム、西はラオス、ミャンマーなどと国境を接しており、多くの民族が暮らす地域でもあります。

私が現在滞っている雲南民族大学は、雲南省の省都・昆明市の大学が集まる「大学城（キャンパスシティ）」にあり、敷地内に池があるほどの広大なキャンパスの中央に、少数民族・タイ族の建築デザインを取り入れた図書館が建設されています。キャンパス内では早朝から英語などを朗読する学生の姿が見られます。この光景は20年前に中国に留学した時と変わりません。中国社会は大きく変化しましたが、キャンパスの朝は変わらないようです。午前7時30分、開館と同時に図書館のロビーや廊下でも多くの学生が小声で朗読をし、自習室の座席争奪戦が始まります。夜11時に閉館するまで多くの学生が利用していますが、ほとんどの学生がインターネットで図書や資料を閲覧するため、蔵書の閲覧よりパソコンや自習資料の持ち込みでの使用率がとりわけ高いようです。

また、大学図書館は展示会場としても利用されています。例えば、

雲南大学図書館では、2019年春に「敦煌壁画芸術展」が開催され、図書館に設けられた展示フロアに、60点の敦煌莫高窟壁画と仏教経典のレプリカが展示されました。美しい壁画を觀賞し

ながら仏教世界に触れることができる展示は、開催から数日でチケットが売り切れるほどの人気で、私が足を運んだ際も多くの観覧者で賑わっていました。展示の解説は歴史や芸術を専攻する学生が担当し、展示を通じて大学教育と市民への貢献が推進されていることを実感しました。

雲南省図書館は、昆明市民の憩いの場として知られている「翠湖公園」のすぐそばにあります。早朝から多くの利用者で賑わっており、パスポートの提示とデポジット100元（日本円で約1600円）で利用貸し出しカードを作れるため、短期滞在でも利用しやすくなっています。先にも述べましたが、雲南省は多くの少数民族が暮らしているため、全ての研究分野において少数民族研究に関わるという話をよく耳にします。その話の通り、本図書館の所蔵は雲南省を中心とした「地方誌」及び少数民族関連の書籍、文献が充実し

ています。また雲南省は「茶の原産地」ともいわれ、プーアル茶の産地であることから、「プーアル茶」研究室も設置され、地域の特徴を生かした図書館作りがなされています。



[写真2 雲南民族大学図書館外観]



[写真3 雲南大学図書館「敦煌壁画芸術展」]



【写真1】ノーザンテリトリー州立図書館外観】



オーストラリア・ノーザンテリトリー州立図書館

Car Bennett St & Mitchell St, Darwin, Northern Territory 0800, Australia
<http://www.ntl.nt.gov.au/> オーストラリア

文学部 英文学科 教授 一谷 智子

昨年8月から今年にかけて1年間、オーストラリアのメルボルン大学で客員研究員を務めるなか、大学図書館以外にも国内の様々な図書館を訪れる機会に恵まれた。印象に残った図書館はたくさんあるが、ここでは地理的には日本に一番近いオーストラリア最北端「トップエンド」に位置する港町ダーウィンにあるノーザンテリトリー州立図書館(Northern Territory Library)について紹介したいと思う。

ダーウィンの街の目抜き通りの一つミッCHEル・ストリートウォーター・フロントに向かって進み、港を見下ろすステイト・スクエアに出ると、その一角に美しい白亜の建築が見える。この建物は、地元の人々から「ウェディングケーキ」と呼ばれ親しまれている州議事堂で、ノーザンテリトリーの州都であるダーウィンのシンボリック存在となっている。ノーザンテリトリー州立図書館は、この州議事堂の中にある。図書館内に足を踏み入れると、テラスから臨むティモール海にまず目を奪われる。南国の太陽の光があふれる広々とした空間で調べ物をしたり、ゆったりと本を読むのは至福のひとつだ。

州議事堂の中に図書館があるのは、他のオーストラリアの州には例を見ない特徴である。そのため利用者は地元の一般市民や研究者に限られず、州議事堂の見学に来たついでに立ち寄る観光客も多い。特に利用目的があって訪れた者でなくとも、2018年に開設された展示テリトリー物語(A Territory Story)は、一見の価値があるだろう。オーストラリアの中心部から北へと向かって広がる(日本の約4倍の広大な面積に及ぶ)ノーザンテリトリーのさまざまな自然や歴史、文化、人々を紹介するこの展示は、シドニーやケアンズ、パースをはじめとした沿岸都市のイメージが強いオーストラリアの別の顔を伝えている。日本

でもよく知られているウルルやカタ・ジュタ、カカドゥ国立公園などの世界複合遺産、太古から継承されるアボリジニ文化、先住民の同化政策による「盗まれた世代」と呼ばれる子どもたちの物語、赤土の大地が広がるアウトバックでの開拓者の暮らし、ノーザンテリトリーで誕生した小説や映画や音楽など、多岐にわたる本図書館のコレクションについて手際よく知ることができる。この展示を入りに、図書館にある豊富な資料を通してさらに学べる仕組みになっているのだ。

この図書館が所蔵する資料のなかで日本人にとって興味深いもののひとつは、日本軍によるダーウィンの爆撃をめぐるコレクションかもしれない。日本の歴史の教科書ではほとんど扱われていない為に、オーストラリアの国土を攻めた唯一の国が日本である事を知らない人は多いが、ダーウィンは1942年2月19日の最初の攻撃から、1943年11月12日までに64回に及ぶ日本軍の爆撃を受け、千人以上の人々が犠牲となった。「もうひとつのパールハーバー」と呼ばれるこの攻撃を検証した歴史的資料に加えて、1950年代に日本の藤田海事会社が戦後の和解事業の一環として行った爆撃による沈船の引き揚げ作業をめぐ



【写真2】ノーザンテリトリー州立図書館内部】



【写真3】Keith Swainによる絵画
Japanese Air Attack on Darwin
Harbour, 19 February 1945】



【写真4】ダーウィン攻撃50周年を記念した
市民による平和への祈りのタペストリー】

る資料(Fujita Collectionとして一部はウェブサイトでデジタル化されている)に至るまで、本図書館は第二次世界大戦前後の日豪関係の資料を数多く所蔵している。図書館のメインホールに飾られたダーウィン空爆を描いた絵画や50周年記念の際に創られた平和を願う市民の声が織り込まれたタペストリーも、この出来事がこの地の人々にいかに大きな比重をもって記憶されているかを物語っている。日本では学ばないもうひとつの歴史を知りたい人にお薦めしたい図書館である。

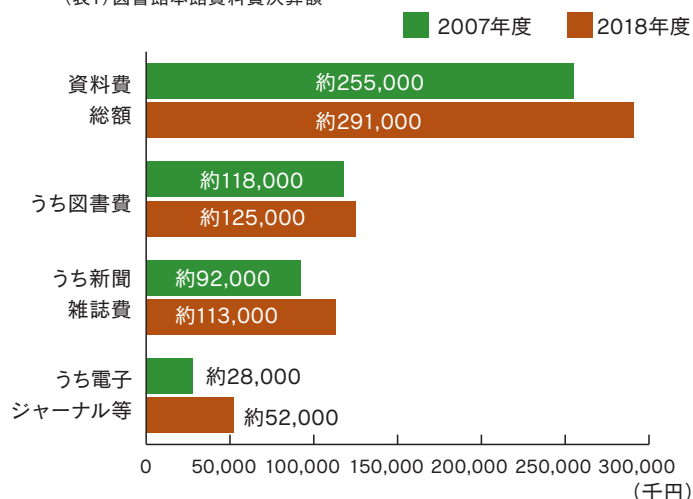
図書館から研究支援を考える

雑誌費の高騰とオープンアクセスの流れ

図書情報課 副課長 山下 大輔

図書館の業務内容は多岐にわたりますが、その中心に考えるべきことは、学習支援及び研究支援であり、長く変わっていないと感じております。さて、今回は図書館で研究支援を意識していく上で、考えておかなければならない、少々困った状況について、整理してみたいと思います。図書館での研究支援については、当然レファレンスも必要にはなりますが、何よりも情報へのアクセスを安定して確保することが、最も重要な事項になります。大学図書館へ関わる以前は、資料費を継続的に確保していくことが求められることを安易に想像していたのですが、近年、前年同額の資料費を確保するだけでは、情報へのアクセスを保証することが難しい状況になってきました。私が、西南学院へ入職した2007年と現在を少し比較してみたいと思います。表1は、図書館本館の資料費の比較です。

(表1) 図書館本館資料費決算額



図書費が微増であることに対して、新聞雑誌費、電子ジャーナル等の費用が増加しています。年間に購入していた資料数は、表2のとおりです。

(表2) 年間購入資料数

	2007年度	2018年度
図書	20,025冊	15,945冊
雑誌	2,229タイトル	1,595タイトル
うち洋雑誌	1,342タイトル	881タイトル
うち電子ジャーナル等	約5,000タイトル	約18,000タイトル

図書数の推移も気になりますが、これは次回に譲り、今回は雑誌に注目します。特に洋雑誌に注目していただきたいのですが、冊子体の購入タイトル数が、大きく減少しているにも拘らず、購入金額は表1のとおり雑誌費全体で約2,100万円増額しています。単純な比較は出来ないのですが、購入雑誌の1タイトルあたりの金額を計算すると、表3となります。

(表3) 購入雑誌1タイトルの平均価格

2007年度 約41,000円 ▶ 2018年度 約70,000円

1タイトルあたりの雑誌費が、大きく値上がりをしていることが分かると思います。冊子体の購入タイトル数を抑え、電子ジャーナルパッケージ等を購読することで、タイトル数を維持している状況です。雑誌価格は1990年代の後半から為替レートが円安になったことで問題が顕在化し、現在まで続いています。為替レートの問題以外に、雑誌価格そのものの高騰があります。学術出版社の寡占が進むと共に、雑誌価格は、毎年上昇を続けています。当時から、シリアルズ・クライシスと呼ばれ、現在まで続いています。

このことに対して、図書館は、手を拱いていた訳ではなく、コンソーシアム(I)を結成し、価格交渉等を行っています。その結果として、電子ジャーナルのタイトル数を確保出来ています。しかしながら、各研究機関の財政状況は好転せず、現在も悪化を続けている状況です。多くの大学図書館で、雑誌の継続的な購読を維持出来ず、研究活動へ支障が出始めています。このような状況に対抗する意味合いで、オープンアクセスという考え方が注目され始めています。状況がこのように悪化していく中で、研究支援を考えていくと、一図書館職員として、研究者のアウトプットに関する領域のことを考えなければならなくなった瞬間でもありました。

学術雑誌というのは、研究や教育に必要な情報を仕入れるツールでもあります。研究者が研究成果を発表する場でもあります。出版社と大学図書館の戦いは、価格の問題に収まることなく、雑誌の購読モデルの転換という問題を産むことになるのです。まず、この問題を解決するために提唱されているのが、オープンアクセスモデルです。オープンアクセスには、大きく分けると、ゴールドオープンアクセスとグリーンオープンアクセスがあります。前者と、後者を簡潔に説明すると、表4となります。

(表4) オープンアクセスの種別

ゴールドオープンアクセス

「著者」が原稿掲載料 (APC) を支払うことにより、「利用者」は費用負担無く、論文を読む。

グリーンオープンアクセス

「著者」自身が、有料の学術雑誌に投稿した論文を機関リポジトリ等にセルフアーカイブすることにより、無料で読めるようにする。

日本は、長くグリーンオープンアクセスを推進してきました。その結果、世界でも有数の機関リポジトリ大国(II)となりました。現在800を超えるリポジトリに、290万点以上のコンテンツが収録されています。しかし、このグリーンオープンアクセスは、100%オープンアクセスの実現を目指すには、少々弊害があります。まず、出版社との契約によって、学術雑誌に投稿された論文が即時セルフアーカイブは、認め

られていないことが多いこと、所謂出版社版の掲載は認められておらず、著者最終稿のみが掲載可能であること等が問題としてあげられます。また、著者自身がアクションを起こさなければ、そもそもオープンにはなりません。研究機関によっては、オープンアクセス方針を打ち出しているところもありますが、努力義務に留まる場合がほとんどですし、強制力を発揮することも難しいでしょう。つまり、グリーンオープンアクセスは、所属機関による情報格差の是正には一定の役割を果たしているものの、雑誌費が高騰していく問題からの脱却には、根本的な解決策としては機能しないものと予測されます。

さて、もう一方のゴールドオープンアクセスですが、こちらは、いかがでしょうか。この契約モデルの大前提は、これまで、研究機関は、「雑誌を購読する」ことに費用を支払っていたけれども、今後は、「所属研究者が雑誌へ記事を掲載すること」に費用を支払うことにしたいというものです。このモデルのポイントは、同じ分野の雑誌AとBを比較した際に、購読する場合、雑誌AとBは、代替財では無いという点です。研究機関としては、費用があるのであれば、両方買いたい、ということになります。一方で、記事を掲載する際には、AとBのサービス(品質や価格)を比較して、都合のよい方に記事を投稿すればよい、ということになり、AとBは代替財として成立します。このことが、適正な競争を産み、トータル価格を押さえつつ、研究成果は全てオープンにしていこうという取り組みです。

この取り組みについては、各国で進んでいます。まず、注目すべきポイントとしては、公的研究の成果をオープンにしていく方針が打ち出されてきています。特に注目すべきものが、プランSです。欧州の11の研究機関が、助成を行った成果については、論文発表直後からのオープンアクセスを実現するイニシアティブ「cOAlition S」が発表され、その中核となるのが、プランSと呼ばれる10の原則です(Ⅲ)。このように、かなり強気な政策を打ち出していかなければ、出版社との交渉が進まない状況です。また、研究者にとって、オープンアクセスを選択することのメリットが、明確に示されていないことも問題の一つと感じています。

さて、仮に取り組みがうまく行くにしても、このような流れの中で、100%のオープンアクセスモデルを実現するためには、当然移行期間が必要になります。購読料を支払っていた時代、購読料に+して投稿料(APC)を支払っていた時代、購読料と投稿料(APC)を纏めて支払っている時代、全て投稿料(APC)となった時代、となります。このように移行期間を見据えた契約が、現在各国で進んでいます。一般に、publish & readやread & publishと呼ばれているモデルです。

まだ、日本で大規模に導入されることは、先と思われませんが、このモデルの推進により、本当に100%のオープンアクセス時代は到来するのでしょうか。そして、図書館が出版社に支払う金額は、本当に低減するのでしょうか。半信半疑で、模索を続けている状況です。図書館で業務を行う場合に、実際にAPCの支払いが行われているのかどうか、把握出来ないことも課題の一つです。

状況を整理する一方で、オープンアクセスモデルが成立するためには、別の視点からの、ある種の問題が発生します。それは、研究評価です。これまで、査読誌への投稿、インパクトファクターの高い雑誌への投稿といった形で研究成果は評価されてきた一面があります。また、研究者自身にとっても、評価の高い雑誌への投稿を目標とすることは、常識の一つであったと推察します。ゴールドオープンアクセスが進むことによって、研究成果に対する正しい評価がなされるかどうか、質が保てるかどうか、という部分が不透明になってきます。

この問題に対しては、「ハゲタカジャーナル」と呼ばれる、査読誌と謳っておきながら、実質的には、査読無しで掲載を行う雑誌が登場してきました。雑な言い方をすれば、お金を払えば成果(査読誌

への研究成果の発表)を買えるという仕組みです。この問題が難しいのは、実体は不透明で、明確な基準や信頼性の高いホワイトリスト、ブラックリストを作成することは、かなりの労力を使います。今後、研究成果の投稿先について、図書館が支援する時代が来るかもしれません。はたして現実的な話なのか、どうか、悩みはつきません。

さて、本学では、この雑誌費の高騰にもう一つの問題があります。それは、アグリケーターの存在です。アグリケーターとは、雑誌出版社ではなく、複数の出版社から雑誌を集めてパッケージとして提供している会社です。個別に買うよりも安価なのですが、以下の問題があります。

- アクセス対象は補償されていません。
(ある日突然読めなくなる可能性もあります。)
- エンバーゴ(掲載猶予期間)があることが多いです。
(近刊1年分は読めない等)
- アーカイブ権はありません。
(契約を止めれば、全て読めなくなります。)

本学では、本学の分野で中心となる雑誌はタイトル毎に購読していますが、それ以外の周辺分野をカバーすることを目的として、アグリケーターの商品で、カバーしています。現在は、契約を維持していますが、維持できないということになれば、閲覧可能雑誌数は、激減することになります。

今後も継続的な情報源の確保について、検討が必要です。一方で、ブラックオープンアクセスと呼ばれる違法アップロードサイトや研究者同士のSNS等を利用したコミュニティ上でのpdfの共有等へどう向きっていくかも、問題です。

これから、オープンアクセスを超えて、オープンサイエンス、オープンデータが推奨されています。研究成果の発表、確保について、図書館で検討を進めることになると思います。求められる人員も変化していく中で、検討しなければなりません。

今後数年で、学術出版界がどのような動きを行うことになるのか、まだまだ不透明な状況ですが、情報を集め、対策を検討していきたいと思います。

- I 日本では、大学図書館コンソーシアム連合「JUSTICE」が結成されている。 <https://www.nii.ac.jp/content/justice/>
- II 「機関リポジトリ公開数とコンテンツ数の推移」国立情報学研究所ウェブサイト <https://www.nii.ac.jp/irp/archive/statistic/>
- III coalition-s ウェブサイト <https://www.coalition-s.org/>

【参考文献】

- ① 大学図書館コンソーシアム連合JUSTICE, “購読モデルから OA 出版モデルへの転換をめざして ～JUSTICEのOA2020 ロードマップ～”, 2019
<https://www.nii.ac.jp/content/justice/overview/>
- ② “OA2020: A Global Initiative to Drive Large-Scale Transformation of the Subscription System”, https://oa2020.org/wpcontent/uploads/OA2020_Conceptual_Framework.pdf, 2017
- ③ 大学図書館コンソーシアム連合JUSTICE, “論文公表実態調査報告 2018年度(公開版)”, https://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/2018_ronbun_chosa.pdf
- ④ 国立大学図書館協会学術情報委員会学術情報流通検討小委員会, “オープンアクセスジャーナルと学術論文刊行の現状－論文データベースによる調査－”, 2014,
<http://www.janul.jp/j/projects/si/gkjhokoku201406a.pdf>

ま たい でん ふく いん しょ

『馬太傳福音書』 ネイサン・ブラウン訳

[6階 R:貴重書庫 193/61/42]

「本」学図書館にネイサン・ブラウン訳『馬太傳福音書』が所蔵されている。ブラウン訳聖書はこれ以外に、新約聖書全巻訳『志無也久世無志』（明治13年、1880年）が収められている。後者は、2008年、聖書の日本語訳事業とそれに従事したネイサン・ブラウン、ジョナサン・ゴープル研究の第一人者である川島第二郎氏の尽力で復刻された。両方とも貴重書だが、『馬太傳福音書』は刊行年と翻訳方針を明確にしている点で、資料価値において後者と比べて遜色はないと思われる。刊行は1876年（明治9年）で、後者より4年早い。翻訳方針は「ギリシャの げんてん より ほんやく したる またいの かきし ふくいんしよ（原文は平仮名分かち書き表記）」とあり、中国の漢語聖書の翻訳ではないことを明らかにしている。平仮名表記の採用は、当時の日本が階級社会であり、その知識層が漢文を尊重していたため、圧倒的多数の社会層である一般の日本人が聖書に親しむには、日常的な日本語であり、かつ音だけでも理解ができる平易なものがふさわしいと考えてのことだった。このようにブラウンは、翻訳に際し、社会層に広く届く翻訳を目指し、用いる日本語やその文体についても細やかな心を配っていた。翻訳にギリシャ語原典を用いた理由は、1850年にアメリカの聖書翻訳団体（American Bible Union, ABU）が起

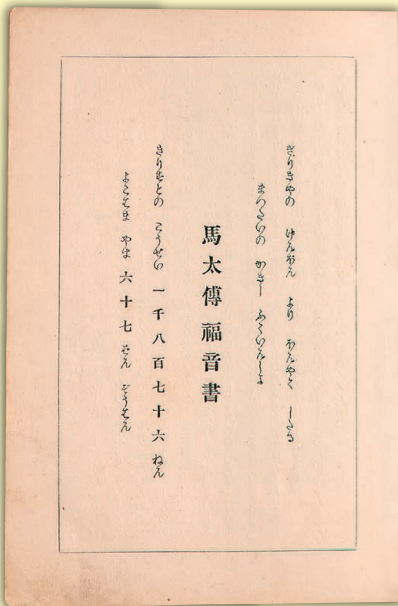
こした「新興の聖書本文批評学に基づくギリシャ語原典による正確な現代訳」という方針にブラウンが沿ったためである。当時の米国バプテスト派の進歩派はこの方針に

賛同し、ブラウン自身も米国バプテスト宣教師同盟（American Baptist Missionary Union）派遣の宣教師であったため、当然のこととしてギリシャ語原典からの翻訳を手掛けた。

ブラウンは、聖書の分冊本翻訳を出しつつ合本巻の完成を目指した。福音書翻訳に限って言えば、最初に『馬可傳福音書』（明治8年、1875年）を完成させ、翌年『馬太傳福音書』、ルカ、ヨハネの各福音書翻訳と続けた。『馬太傳福音書』は、初期のブラウン訳分冊聖書という価値を超えて、近代日本における日本語訳聖書の先駆けでもあったと言える。因みに、日本における新約聖書の翻訳は、1870年代初頭にプロテスタント諸派によって共同事業として着手され、1880年の完訳後に再検討が加えられて『新約全書』として刊行された。実はブラウンは、この共同翻訳事業に招かれて加わっている。このように貴重な価値を有する『馬太傳福音書』は、国内の大学図書館の内、本学図書館と他大学図書館の2校のみが所蔵している。

本学図書館が本書を所蔵するようになった経緯を短く述べる。先に紹介した川島第二郎氏の膨大な蔵書の取り扱いについては、川島家と交流のあった横浜開港資料館の配慮で西田書店（横浜市）が保有することになり、そこから本学図書館の購入の道が開けた。西田書店から筆者の手元に膨大な蔵書リストが送られてきたが、蔵書の価値を判断する術を持たなかったため途方にくれた。期せずして、当時学院百周年編纂のために契約職員として勤務していた松岡正樹氏（現日本バプテスト同盟京都教会牧師）が、川島氏の傍にあつて研究活動を助けていたことを知り、所蔵に相応しい蔵書の選択をお願いすることにした。その結果、複数の蔵書が候補にあげられ、神学部教授会の協議・検討を経て、最終的に『馬太傳福音書』に白羽の矢が立てられた。

聖書の日本語訳には、冒頭で述べたネイサン・ブラウン、ジョナサン・ゴープルという2名のバプテスト派宣教師が先駆的でユニークな貢献を残している。ゴープルは日本で最初にマタイ福音書の翻訳を行い、ブラウンは、これも日本で最初に新約聖書全巻の翻訳を行なった。バプテスト派の大学である本学は、この貢献を知り、誇りに思つてよいのではないか。因みにブラウンは聖書以外にも、讃美歌の翻訳も手がけている。



【図1】「ギリシャの げんてん より ほんやく したる またいの かきし ふくいんしよ」とある

編集後記

「世界を変えた書物」展に行きました。ニュートン、コペルニクス、ダーウィン、レントゲン等の著名な学者の初版本が展示されており、中には500年以上も前に出版されていたものがありました。現代のデジタル情報は劣化することなく、利用と保存ができるためとても便利ですが、紙で出版されたものが数百年を経て現存していることは驚きだけでなく、デジタル技術にはない年月の重みも感じるものでした。スマートフォンを見つめることが多い現代社会ですが、たまには紙の書物を手に取って、ゆっくりとページを捲ってみてはどうでしょうか。

(T.N)

西南学院大学図書館報 No.187

2019(令和元)年11月7日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/>

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。